
作者と科学部のとある一日～激闘ッ！数学甲子園ッ！！～

上川 勲

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

作者と科学部のとある一日～激闘～！数学甲子園～！～

【Zコード】

Z8895B

【作者名】

上川 勲

【あらすじ】

史上最大の難関が、名ばかりの科学部に襲いかかるッ！好評につき第三弾、レディ・ゴウだ！ 皆の者！ 12月31日に、なんだかんだで前半が融合したぞ！

劇において女性が男性の役を演じる」とよくあることだが、その逆である男性が女性の役を演じることは早々めったにないことがある。

同様にサラリーマンとはよく聞く単語だが、サラリーワーマンとはあまり聞かない単語である。

そんなところに微妙な男女差別を感じながらも、この僕ことなたぐは日々の生活を何気なくかつ平穏に過ごしているわけだが、…さて、そんな僕の平穏な日々を金魚すべにて使うあるおたまじやくしのよしおものについている紙があつそつと破れるようじぶつ壊してくれたとある日々のことをお教えしよう。

そう、あれは去年の出来事である……。

僕が六時間用まである授業を、眠気を存分なまでに感じ取り、やして終了して掃除をしてそのまま部室へと足を運んだときのことである。

ちなみに僕が所属している部活は、表向きには「科学部」という名を持つているものである。

しかし悲しいかな嬉しいかな、ちなみに僕は嬉しいかなのほうになるのだがこの科学部、実は名前ばかりな部活である。

この科学部でやっている部活動の内容とは、本来はいろいろな実験をやつたりするものなのだが、実のところ実験をする機会など年に片手で数えられるほどであり、「それじゃあそのほかの日々いつ

たい何をやつてこるんだ?」と問われれば、実のところなんでもありといったところだ。例をあげるならば、部室で各自の部員が持ち込んでくるさまざまな遊び道具を使って遊ぶことである。

そんな科学部とは名ばかりの部活にいる僕だが、そんな僕にいや、僕たちに史上最大と言える難関が迫つて来ようとは、誰もが想像つかないだろう。

僕のそのうちのひとつだった…………。

ガラリ

そんな音とともに部室の扉がスライドされ、現れたのは科学部の部長だった。

そして、部長の口からこんな言葉を聞くことになる。

「数学甲子園に出たんだ」

……スーガク「ウシエン?

聞きなれない単語だ。野球+数学といった異色の「ラボレーショ

ンが実現しているイベントなのか?

「なんじやそりや?」

当然とばかりに訊くのは平面ペツ坦んである。僕もその質問をしたかったので特に止めないこととする。

「これだ」

そう言って部長は手に持っていた紙を平面ペツ坦んに見せる。僕もその紙をのぞき見ると、そこにはマッチ棒数本を使ってどうのこ

うのしるー……とかいうなんだかエロサブリチックな例題が書かれていた。

これがどうも数学甲子園とかいうやつの問題らしい。

「これなの簡単じゃん」

と部員の誰かが言った。

自慢じゃないがはつきり書おつ。この時点では僕の脳はまったく理解できていなかつた。

せりにこの後話が長くなるのではじょつて説明すると、どうもこの甲子園に僕と平面ペつたんと部長が出場しなければならぬらしい。

ひとり候補がいたのだが、その人は用事云々があつてその日はどうもいけないらしいので、その後釜に部長が入つたというわけだ。それでなぜ僕と平面ペつたんは無条件で出場が決まつていたのかと言つと、単に理系クラスに入つてゐるからである。だが、あえて言おう。

僕は理数系が大の苦手だ！

それともうひとつ疑問である、なぜ出場しなければならないのか？ そんのは簡単だ。顧問の教師の氣まぐれである。

こういうわけで、僕と平面ペつたんと部長の計三人は、数学甲子園に出場することになつた。

……生き恥はなるべくせりしたくないのだがなあ。自慢じゃないが、さきほども述べたように理系だけど数学にはあまり自信がないぞ。

そしてそのときがやつてきた。……来なくていいのに。

何かしら理由をつけて休んでやろうかと思ったが、人数が足りなくなるとその時点では不戦敗だ。

ここで四百万部突破の某人気ライトノベルの少年エスパー戦隊のような仕事が入れば嫌でも休むことができるのにな。

数学甲子園の会場は、甲南大学だった。

僕が「おおッ！これが大学か」とそんな考えに漫る余裕もなく中に入り、そして受付まで済ませてしまった。……本当にやるんだ。

あたりを見渡してみると、あきらかに秀才っぽい人や天才っぽい人しかいないので、僕の不幸気分に拍車をかけている。

自慢じゃないがな、僕たちのメンバーはいたって普通の凡人軍団だぞ？にわとり鶏の卵から鶏うずらが生まれるような普通の凡人つぶりだ。うずら鶏の卵からドラゴンが生まれてきてるんじゃないんだ。

大丈夫かなあ。この先……。

そんな不安な考えが、僕の頭の中で浮かんでいた……。

さて、なんだかんだで後半になってしまったわけだが、なんだかんだで一話にまとめてしまってもよかつたのではないかと思う今日この頃。

それでもつて思つてしまつたがために、12月31日たる今日、前後半に分けていた本拙作をひとつにまとめてしまつちゃつたりなんかしたりしたわけだ。

まあなんだ。大掃除のひとつさ。

まとめれるものはまとめた方が便利だし、編集作業が微妙に楽になつて助かるからな。

閑話休題。後半に入ります。

体力測定で千五百メートル持久走をして、ものの一時間後に筋肉痛の痛みに苦しめられながらひしひしと高校一年生のときと比べて体力が落ちたのだなあ、と感じながらも家に帰宅し、英語Writingの授業のための予習をしてから、この小説を書いているわけだが…………眠い。それが現在の僕ことなかたくの素直な感想だ。一日八時間は寝ないと僕は授業の途中で戦闘不能になつてしまふので早いところ書き終えて夕食食べて風呂に入つて寝ようと思つている。

……と、こんなことを書いていれば「書く気ねえのか?」というツッコミが飛んできそうなのだが、言つておこう。やる気は十二分にありますよ。

例えるならば凝視で空飛ぶ飛行機を墜落させることができるくらいのやる気がありますよ。……さっぱり例えがわからないかもしないが、僕もさっぱりわかっていないのであいこだ!（やけくそ氣味に言つのがコツ）

さて、他愛ない無駄話を延々と述べたところで本題に入つていこう。

数学甲子園……略して数甲。^{すうじゅ}別に略さなくてもいいのだが、現代人はなにかと略をするので試しにしてみることにしただけだ。

ちなみに僕が知っている略語は、ほかにはパパイヤ鈴木を略してパパスというものを知っている。……え？ 言わない？ となりのサザエモンが言つてたんだけど……みんなさんが言わないと言つのであれば言わないんだろうね。

ちなみにこの数甲は初め予選が行われて、その予選の順位の上位何組かが本戦に出場できるというものだった。

さてそれはさておき、数甲の第一試合（？）は個人戦だった。

チーム三人各自に問題用紙が配られ、それを制限時間内に解くというもののだが……正直に言おう。とんでもなく難しいッ！…！初めのほうは「あ、これってけつこうできるんじゃない？」と、淡い期待を抱いていたのだが、さっぱりダメだった。片手で数えられるほどしか正解していないのではないのだろうか……とのとき思つてしまつた。

続いて第一試合目、団体戦だった。

各々のチームごとにひとつずつ解いていくといつものだった。ちなみに問題は六〇ハザード問題（だった気がする）でその中から答えを選んでいくというものだ。

全部で十一問あり、でたらめに選んでいつても一つ一つは正解できる……確率論的に。

しかし、こんな甘い考えがダメだったのか、事態は確率論を凌駕^{りょうが}してしまうものだった。

「……これだる、これ」

「え？……でもこれっぽくないか？」

「ええいッ。書けば当たるだろ。これにしよう

と、我がチームこと“風林火山”はチームメンバーの相性が最悪といつても過言ではなく、各々の意見のぶつけ合い。そして反論す

るのが面倒臭くなつて適當の意見に従つて解答するといふものだつた。運がどうこうという問題ではない気がするな……。

ちなみに“風林火山”はいつたい何の略なのかといふと「疾きこと風の如く、徐かなること林の如く、侵し掠めること火の如く、動かざること山の如し”であるが、後に平面ぺったんは語り、そしてその語つた言葉こそこの“風林火山”に相応しいものだつたと認識させられることになるのだ。

そんな凸凹トリオが問題を解き続けた結果、……皆の者、聞いて驚くな。確率論を凌駕した結果になッ！

ズバリッ！十一問中〇問正解だッ！！パンパカバーンッ！ヒューヒューッ！ナイスミドルだぜッ！！

…………すんません。現実逃避していました。

「〇問つて……」

信じられないね。運が悪すぎというかなんというか、悪運が強すぎるんだね。そもそも運に頼る問題ではなく考える問題だった気がするけどそんなことすら忘れてしまうくらいショックだつたね。

だけど実のところ、個人戦では結構稼げている自信がある。さきほど個人戦の問題は難しい、とか言つてたが、実のところ結構あつている自信が根拠なしにあつた。

…………さて、昼食を食べに行くか。

「おまえら、本戦出れそつか？」

それが昼食中顧問の教師が言つた一言だつた。

はつきり言へぬね、ゾビ。

なにせ団体戦全問不正解の快挙を成し遂げたわけだし。ある意味
奇跡だ。

「正直無理っぽいですよ」

僕と平面ペツ坦の言葉を代弁して部長がそんな言葉を言った。
汚れ役はすべて君に任せるとよ。

「でも個人戦は結構いたと思うぞ」

何とかして僕たちのがんばりをフルにアピールしようと、平面ぺつたんが弁護する。

しかし、教師は特に気を悪くしたわけでもなく「まあ、今回がダメだつたら次回一年が何とかしてくれるだろう」という感じの台詞を言つただけだった。

だ。いや、助かった。逆鱗に触れたらどんな感じかと思ひてたん

さて、結果を言おうか。我らが“風林火山”的順位をツ！

恐る恐る順位を見てみると……

「……げッ！」

「マジかよー?」

「……ふ」

鼻笑いがこぼれてしまった。

言わなくてもわかるだろうが、あえて言おつ。

1位だッ

はははははははは……………!! 僕たちが本氣を出せばこんな

ものさシ!

だが、どういづわけか1位を取ったにもかかわらず本戦には出られないらしい。なぜ!? WhY!?

……ふ、しきばっくれるのもここまでにしておくか。なあに、ちよつとした現実逃避。

つまりは1位さ、下から数えてな。

……なにも言わないでくれ。数甲に出たそのときからオチは決まつていたってことさ。

だが、実のところここで敗退してよかつたと思つてゐる自分もある。

その理由は、本戦の問題内容だ。

問題内容は忘れたが、とにかく難しかつた問題だった。光だかフイルムだか……そんな感じの問題だったと思つ。

とにかく、僕たちの頭では到底理解不能な問題だった。

なお、後に平面ぺったんは語る。

“風林火山”の略はな、『風の』とく疾くわからなくなり、林の中の『』とく迷い、敵の攻撃火の『』とく、動けなくなること山の如しだぞ

その言葉に、僕は心から同意した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8895b/>

作者と科学部のとある一日～激闘ッ！数学甲子園ッ！！～

2010年10月28日07時52分発行